

トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』と  
北杜夫の『楡家の人びと』

一日独語における諧謔表現の相違を探る一

宮内伸子

富山大学人文学部紀要第65号抜刷

2016年8月

# トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』と 北杜夫の『楡家の人びと』

一日独語における諧謔表現の相違を探る<sup>1)</sup>

宮内伸子

## 1. はじめに

本稿は、トーマス・マン (1875-1955) の『ブッデンブローク家の人びと』と北杜夫 (1927-2011) の『楡家の人びと』という2つの作品を取り上げて、ドイツ語と日本語それぞれによる小説においてユーモアを醸し出す表現の相違を探っていくことを目的とする。それぞれの言語の特性が、イロニーやユーモアといった表現にも反映しているのではないかと考えてのことである。

この両作品を互いに比較の対象とするのは、『ブッデンブローク家の人びと』と『楡家の人びと』には多くの共通点が見られるからである。そもそも北杜夫が『楡家』を書いたのには、『ブッデンブローク家』が直接の動機になっているといわれている。

両作品とも、没落の物語であるにもかかわらずユーモアを感じさせる。ひっきりなしに人が死んでいき、結婚の失敗も続くというストーリーなのに、それはなぜなのだろうか。どのような書き方をされているから、読み手はユーモアを感じるのだろうか。

本論に入る前に、『ブッデンブローク家の人びと』と『楡家の人びと』について、簡単に紹介しておきたい。

『ブッデンブローク家』は1901年に発表された。このとき作者のトーマス・マンはまだ20代半ばであった。周知のようにこの作品は、マンの生家をモデルにした、19世紀のリューベックの豪商ブッデンブローク家四代の物語である。1835年から1877年までの42年間で扱われていて、全体が11部構成になっている。各部は10章前後から成る場合が多いが、15章や4章の部もある。

ブッデンブローク家初代のヨーハンは、生活力旺盛な大商人である。二代目のジャン（コンズル）は教養ある信心深い実業家である。三代目のトーマスも勤勉に家業に取り組むが、家運は次第に傾いていく。そして、四代目のハンノーになると、母親譲りの音楽の才能には恵まれ

---

1) 本稿は日本独文学会北陸支部研究発表会 (2015年11月14日、於：新潟) での口頭発表「トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』のイロニーとユーモアについて — 北杜夫の『楡家の人びと』との比較を手がかりに日独語における諧謔表現の相違を探る —」に修正を加えまとめたものである。

たものの虚弱で夭折してしまう。それとともに商会も解散となる。

一方の『楡家の人びと』は1964年に発表された。作者の北杜夫は旧制松本高校時代にトーマス・マンを知り、傾倒する。わけでも『トニオ・クレーガー』は、暗記するほど繰り返し読んだという。『ブッデンブローク家』が『楡家』執筆の直接的な動機になっていることは、冒頭ですでに述べた。

『楡家』も、『ブッデンブローク家』同様、ある一族の繁栄と没落がテーマである。『楡家』の方は、1904年から1946年までと時代は70年ほどずれるがやはり42年の歳月を扱っている。全体は大きく3部に分けられ、それぞれが10章から成る。第1部は、楡基一郎が創設した精神病院を主な舞台として、基一郎の栄光の日々が描かれるが、第1部の終わりで病院が焼失し、その後基一郎が亡くなる。大正時代の終わりでもある。第2部は、次第に戦争に傾いていく世相を背景に、楡家二代目である、娘婿の徹吉（基一郎の長女龍子の夫）と基一郎の長男歐洲の姿を中心に描かれる。徹吉は病院経営と家庭の不和に悩む。第3部では、時代は太平洋戦争に突入し、楡家三代目である、徹吉の子供達の姿が中心になる。徹吉の長男峻一は出征し、南の島で飢餓にあえぐ。徹吉の娘藍子、次男周二も戦争に翻弄されたあげく、終戦を迎える。ここで物語は終わる。

## 2. 『ブッデンブローク家の人びと』と『楡家の人びと』に見られる諧謔表現

### 2.1. 『ブッデンブローク家の人びと』の場合

『ブッデンブローク家』の場合は、ユーモアを醸し出す表現の手段として、次に示す5点が活用されているのではないと思う。それぞれについて文例を挙げながら見ていくことにしたい。

1. ライトモチーフ
2. 詳細な人物外見描写
3. 体験話法
4. 敵役の見解の紹介
5. 高尚と卑俗の同列

#### 2.1.1. ライトモチーフ

『ブッデンブローク家』ではライトモチーフ (Leitmotiv) が駆使されている。<sup>2)</sup> ライトモチーフはユーモアと直結するものではないが、そうだとすると、同じ表現の繰り返しは滑稽感を醸し出すことがよくある。以下はこの作品で頻繁に用いられているライトモチーフの例である。

- ・クリスチアン die Augen umherschweifen lassen [目をきょろきょろさせる] (25回)

---

2) 『ブッデンブローク家』のライトモチーフに関しては、保坂 (1963) を参考にした。

- ・ トーニ ich bin keine Gans mehr [私はもはやバカな女ではない] (14回)
- ・ ブライテ通りの三姉妹 sie bewiesen für das Unglück ihrer Cousine ein weitaus lebhaftes Interesse [従姉妹の不幸に大げさすぎるほどの興味を見せた] (21回)
- ・ クロティルデ hagere, demütige, stillessende Klothilde [痩せて、控えめで、静かに食べ続けるクロティルデ] (18回)

三代目トーマスにはクリスチアンという弟があり、この人物は子供時代も成長後も滑稽な人物として描かれている。クリスチアンのライトモチーフである die Augen umherschweifen lassen [目をきょろきょろさせる] は作品全体で計25回も使用され、彼が生涯落ち着きのない滑稽な人物であり続けたことを、この短い表現で的確に伝えている。

トーマスの妹トーニは、『ブッデンブローク家』のヒロインともいえる存在である。彼女は二度結婚するが、二度ともうまくいかず実家に戻ってくる。トーニのライトモチーフの一つである ich bin keine Gans mehr [私はもはやバカな女ではない] は最初の離婚を経験してからの彼女の口癖である。こう言いながらもトーニは——愚行と決めつけては酷だが——以前と同様の行動を取り続けるのであるから、こちらはかなりイロニー感を醸し出す元になっている。

トーマスたちには従姉妹もいる。ブライテ通りに住むフリーデリケ、ヘンリエテ、ピフィーという三姉妹であるが、彼女らは常に皮肉っぽい意見を述べる役回りを務める。語り手は、彼女たちの口を借りてトーニ等物語の主要人物たちへの批判的見解を代弁させているかのようだ。ブライテ通りのこの三姉妹は、ある意味、ギリシア演劇のコロスの機能を果たしているといえるのかもしれない。

クロティルデという遠縁の娘にもライトモチーフが使われている。彼女はトーニと同年配の娘で、実家が貧しいためブッデンブローク家に置いてもらっている。そんなクロティルデのライトモチーフは、hagere, demütige, stillessende Klothilde [痩せて、控えめで、静かに食べ続けるクロティルデ] で、この表現自体十分にイロニッシュだが、それがライトモチーフとして18回も使われると皮肉が際立つ。

さまざまな場面で繰り返されるライトモチーフにより、人間の性格の変わらなさ、変わりづらさが伝わってくる。それは滑稽感をもたらす一方で、人間性に対する作家の諦念のようなものも伝わってくる。

### 2.1.2. 詳細な人物外見描写

ユーモアを醸し出す表現の2つ目として、作中人物の詳細な外見描写を挙げたい。人物の詳細な外貌描写はトーマス・マンの特徴の一つだが、描写が詳細になればなるほど、当該人物の短所にも触れずにはいられなくなるのは当然だろう。

- (1) Die Ähnlichkeit mit dem Großvater hatte sich bei Thomas so stark entwickelt wie bei Christian diejenige mit dem Vater; besonders sein rundes und festes Kinn und die feingeschnittene, gerade Nase waren die des Alten. Sein seitwärts gescheiteltes Haar, das in zwei Einbuchtungen von den schmalen und auffällig geäderten Schläfen zurücktrat, war dunkelblond, und im Gegensatz dazu erschienen die langen Wimpern und die Brauen, von denen er gern die eine ein wenig emporzog, ungewöhnlich hell und farblos. Seine Bewegungen, seine Sprache sowie sein Lachen, das seine ziemlich mangelhaften Zähne sehen ließ, waren ruhig und verständig. Er blickte seinem Beruf mit Ernst und Eifer entgegen... (S.76)

[トーマスの祖父似は、クリスチアンの父親似と同じように、日ごとにはっきりとしてきて、とくに、トーマスのがっしりした丸い顎と、筋が通り、線の美しい鼻は、祖父譲りであった。横で二つに分けられている髪は、目立つほど静脈が浮き出ている狭いこめかみから、二つの入江のように後ろに掻き上げられていて、濃い色のブロンドであったが、長い睫毛と眉は反対に並外れて明色で、無色にちかく、一方の眉がいくぶん引き上げられがちであった。挙止も言葉も笑いも、落ち着いていて、分別があった。笑うと、かなり不揃いの歯が見えた。トーマスは、自分の仕事を真面目に熱心に学びつづけた。(上104頁)<sup>3)</sup>

(1) はトーマス・ブッデンブロークの外見を描写したくだりである。詳細に描写すると、祖父譲りの美しい鼻筋の描写で終わらず歯の悪さにも触れることになる。トーマスは後年、歯の疾患のせいで命を落とすことになるので、ここはその伏線にもなっている。

- (2) Durch den Garten kam, Hut und Stock in derselben Hand, mit ziemlich kurzen Schritten und etwas vorgestrecktem Kopf, ein mittelgroßer Mann von etwa zweiunddreißig Jahren in einem grüngelben, wolligen und langschößigen Anzug und grauen Zwirnhandschuhen. Sein Gesicht unter dem hellblonden, spärlichen Haupthaar war rosig und lächelte; neben dem einen Nasenflügel aber befand sich eine auffällige Warze. Er trug Kinn und Oberlippe glattrasiert und ließ den Backenbart nach englischer Mode lang hinunterhängen; diese Favoris waren von ausgesprochen goldgelber Farbe. –

---

3) 参考までに、*Buddenbrooks* からの文例には岩波文庫の望月市恵訳も併せて載せておく。ちなみに、邦訳は筆者の知るところでは8種類ある。それぞれの訳者と出版年は次のとおり：成瀬無極（1932年）、吉良良吉（1937-39年）、実吉捷郎（1955年）、川村二郎（1968年）、望月市恵（1969年）、円子修平（1972年）、森川俊夫（1975年）、松浦憲作（1976年）。

Schon von weitem vollführte er mit seinem großen, hellgrauen Hut eine Gebärde der Ergebenheit...  
(S.95)

[庭園を横ぎって、帽子とステッキを片手に持って、三十二、三歳になる中背の男が、かなりちょこちょこした小刻みな足取りで、裾の長い緑色がかった黄色いふかふか柔らかい服を着て、麻の撚り糸の灰色の手袋をして、頭を前へ突き出すようにして近づいてきた。髪が薄くなって、淡いブロンドで、バラ色の顔に微笑を浮かべていた。片方の小鼻の横の大きい疣が目を引いた。顎と上唇の上は、ひげを生やさずに剃っていて、頬ひげだけを、イギリス風に長く垂らしていたが、この頬ひげはあざやかな金色だった。——遠くからもう、淡灰色の大きな帽子を胸にあてて、うやうやしくお辞儀をした。……(上132頁)]

(2) はトーニの最初の結婚相手であるグリーンリッヒが、ブッデンブローク家に初めて登場する場面である。やたらに気取った人物であるが、詳細に描写されると、鼻の横の大きい疣まで見逃されることはない。

(3) Es war ein Mann von vierzig Jahren. Kurzgliedrig und beleibt, trug er einen weit offenstehenden Rock aus braunem Loden, eine helle und geblünte Weste, die in weicher Wölbung seinen Bauch bedeckte und auf der eine goldene Uhrkette mit einem wahren Bukett, einer ganzen Sammlung von Anhängseln aus Horn, Knochen, Silber und Korallen prangte, – ein Beinkleid ferner von unbestimmter grau-grüner Farbe, welches zu kurz war und aus ungewöhnlich steifem Stoff gearbeitet schien, denn seine Ränder umstanden unten kreisförmig und faltenlos die Schäfte der kurzen und breiten Stiefel. – Der hellblonde, spärliche, fransenartig den Mund überhängende Schnurrbart gab dem kugelrunden Kopfe mit seiner gedrungenen Nase und seinem ziemlich dünnen und unfrisierten Haar etwas Seehundsartiges. Die ›Fliege‹, die der fremde Herr zwischen Kinn und Unterlippe trug, stand im Gegensatz zum Schnurrbart ein wenig borstig empor. Die Wangen waren außerordentlich dick, fett, aufgetrieben und gleichsam hinaufgeschoben zu den Augen, die sie zu zwei ganz schmalen, hellblauen Ritzen zusammenpreßten und in deren Winkeln sie Fältchen bildeten. Dies gab dem solcherart verquollenen Gesicht einen Mischausdruck von Ergrimmtheit und biederer, unbeholfener, rührender Gutmütigkeit. Unterhalb des kleinen Kinnes lief eine steile Linie in die schmale weiße Halsbinde hinein... die Linie eines kropffartigen Halses, der keine Vatermörder geduldet haben würde. Untergesicht und Hals, Hinterkopf und Nacken, Wangen und Nase, alles ging ein wenig formlos und gepolstert ineinander über... Die ganze Gesichtshaut war infolge aller dieser Schwellungen über die Gebühr straff gespannt und zeigte

an einzelnen Stellen, wie am Ansatz der Ohrläppchen und zu beiden Seiten der Nase, eine spröde Rötung... In der einen seiner kurzen, weißen und fetten Hände hielt der Herr seinen Stock, in der andren ein grünes Tirolerhütchen, geschmückt mit einem Gemsbart. (S.330f.)

[四十歳ほどになる男であった。手足が短く、肥満していた。粗いラシヤの褐色の上衣を着ていたが、まえをひろく開いていた。下に着ているチョッキは明色で、花模様がついていて、腹をやんわりと、こんもりと包んでいて、時計の金鎖を光らせていたが、この鎖には真物の花束が結びつけられていたように、角、骨、銀、珊瑚でつくられた垂れかざりが、ぎっしりと結びつけられていた。——ズボンは、灰緑色のはっきりとしない色で、つんつるてんで、ひどくごわごわした生地で作られているらしくて、ズボンの裾が襷をつくらずに円形になって、長靴の幅ひろい短い筒をかこんでいた。——総のように口を蔽っている口ひげは、乏しく、淡いブロンドで、鼻は団子鼻であった。かなり薄くなった髪は、手入れをされていなかった。口ひげは、まん丸い顔に海豹のような風貌を与えていた。面識のない客が、下唇と顎のあいだに生やしていた「山羊ひげ」は、口ひげとちがって少し剛毛のように逆立っていた。両頬は月のように丸く、脂肪肥りをして、ふくれていて、目を押し上げているともいえ、淡青色の目がそのために糸のように細くなり、目尻に皺が何本もできていた。その結果、この脹れぼったい顔が、なにか怒っているような、しかし、律儀そうな、頼りなさそうな、いじらしい好人物らしい感じをおびていた。小さい顎の下に、首の線が、細い白いネクタイの線へのんべらぼうにつづいていたが、……甲状腺腫症めいているこの首には、高いカラーをつけることは考えられないように見えた。顔の下部、首、頭の後ろ、うなじ、頬、鼻、どこもかもなんとなく形もなく膨れ上がり、盛り上がっていて、つながっていた。……顔の皮膚の全表面が、この膨れ上がりのために、なんとなくぴんと緊張していて、一つ一つの場所、たとえば、耳たぶの付け根、鼻の左右でざらっぽい赤味を見せていた。……ぼちゃっとした短い白い手の一つに、ステッキを持ち、一つに緑色のチロール帽を持ち、その帽子に羚羊の剛毛の房がかざられていた。(中114-115頁)]

(3)で描写されているペルマネーダーは、トーニの2番目の夫になる人物である。これもブッデンブローク家の人たちの前に初めて登場する場面で、実に詳細に外見が描写されている。海豹のような風貌という表現はユーモラスである。なお、波線下線部は邦訳においてオノマトペが用いられている箇所である。原文がオノマトペでなくても、日本語訳ではオノマトペが活用されているのがわかる。

ちなみに、作中人物の外見ではなく内面を表現する場合には、『ブッデンブローク家』では会話や手紙が活用されている。一方、『楡家』では語り手が自在に作中人物に成りきって内面

を語る箇所が随所に見られる。

### 2.1.3. 体験話法

ユーモアを醸し出す表現手段の3番目として体験話法を挙げたい。体験話法を使って、語り手は時に作中人物の内側に入り込み、その人物の声を真似して語る。そんな声真似の際に、皮肉を混じえたり、共感を含ませることもある。

- (4) »Nein, nein!« sagte Tony plötzlich in tröstendem Ton. Ihre Tränen waren versiegt, Rührung und Mitleid stiegen in ihr auf. Mein Gott, wie sehr mußte er sie lieben, daß er diese Sache, die ihr selbst innerlich ganz fremd und gleichgültig war, so weit trieb! War es möglich, daß sie dies erlebte? In Romanen las man dergleichen, und nun lag im gewöhnlichen Leben ein Herr im Gehrock vor ihr auf den Knien und flehte!... Ihr war der Gedanke, ihn zu heiraten, einfach unsinnig erschienen, weil sie Herrn Grünlich albern gefunden hatte. Aber, bei Gott, in diesem Augenblicke war er durchaus nicht albern! Aus seiner Stimme und seinem Gesicht sprach eine so ehrliche Angst, eine so aufrichtige und verzweifelte Bitte... (S.112)

[[「いいえ、いいえ!」とトーニは、ふいに慰める口調で言った。涙がとまり、感動と憐憫とが心に湧き上がった。ああ、この男はわたしを、どんなに深く愛しているのだろう、わたしには他人ごと、どうでもいいと感じられるこの問題を、こんなにつきつめて考えているとは! わたしが、こういう場面に立たされるなどと、考えられたらどうか? 小説のなかでは、こういう場面も描かれているが、現実の世界で、一人の男が、目の前にフロックコートで跪いて、哀願しているのだった!……トーニはグリーンリッヒ氏を、馬鹿みたいな男と思っていたので、この男と結婚するのは、考えただけでも馬鹿げた考えと思っていた。しかし、ああ、今のこの男は決して馬鹿みたいな男ではなかった! この男の声にも、顔にも、心からの不安と、思いつめた一途の哀願があふれていた。…… (上157頁)]

- (5) »O Gott!« stieß sie plötzlich hervor und sank auf ihren Sitz zurück. Erst in diesem Augenblick ging alles vor ihr auf, was in dem Worte »Bankerott« verschlossen lag, alles, was sie schon als kleines Kind dabei an Vagem und Fürchterlichem empfunden hatte...»Bankerott!...das war etwas Gräßlicheres als der Tod, das war Tumult, Zusammenbruch, Ruin, Schmach, Schande, Verzweiflung und Elend...»Er macht Bankerott!« wiederholte sie. Sie war dermaßen geschlagen und niedergeschmettert von diesem Schicksalswort, daß sie an keine Hilfe dachte, auch nicht an eine, die von ihrem Vater kommen könnte. (S.218)

「まあ、どうしましょう！」とトーニはふいにさげび、クッションへぐったり腰をおろした。この瞬間になってから、「破産」という言葉の意味が、初めてはっきりとし、子供のころからその言葉に感じていた漠然とした恐ろしさが、よみ返ってきた。……「破産」……それは死よりもぞっとするものであった。混乱、崩壊、零落、汚辱、屈辱、絶望、悲惨であった。……「あの人、破産するんだ！」とトーニは、くり返した。運命のその言葉に気持ちをすっかり打ちのめされ、たたきのめされ、どんな救いの手も、父親から差しのべられることも考えられた救いの手も、考えられなかった。(上309頁)]

(4)と(5)は、トーニの思考を体験話法(下線部)で再現しているケースである。(4)では、グリーンリッヒが彼女の持参金目当てに恋する男を演じているとはつゆとも知らぬトーニの気持ちを、語り手は皮肉を交えつつ再現している。(5)では、破産を死よりもぞっとするもの、と死のことなどまだよく理解しているはずのないトーニが考えるところにおかしみと語り手の皮肉が籠る。

体験話法では作中人物の視点と語り手の視点が合わさる。この現象は日本語による小説では実に頻繁にすんなり生じるので、逆にそれゆえ、このような語り方をしても特別な効果は期待できないともいえる。語り手の視点と作中人物の視点とが本来明瞭に区別されて表現される言語であるからこそ、このような話法の効果が際立つのである。

#### 2.1.4. 敵役の見解の紹介

ブライテ通りの三姉妹は常に冷笑的な見解を口にする。とりわけ同世代の従姉妹トーニの行動や身の振り方に対して手厳しい。それは先に述べたように、物語におけるコロスの役割、すなわち作中人物に向ける語り手の暖かい視線が一方的にならないようバランスを取る働きをしているようでもある。しかし、彼女らの置かれた境遇を勘案すると、三姉妹の意見は単なる負け犬の遠吠えともいえそうで、物語の語り手はこの三姉妹の嘲笑的言動も含めて、人間の愚かさをユーモアで包みこんで語っているのだろう。

(6) *Unterdessen nahm sie hier der Vater beiseite und sprach ein ernstes Wort, ließ dort die Mutter sie bei sich Platz nehmen, um eine endliche Entschließung zu fordern... Onkel Gotthold und seine Familie hatte man in die Angelegenheit nicht eingeweiht, weil sie immer ein bißchen mokant gegen die in der Mengstraße gestimmt waren. (S.115)*

[父親は、トーニをだれもない場所へ呼んで、熱心に言って聞かせたし、母親も、トーニを横へ坐らせて、最終の決断を迫まった。……ゴットホルト伯父とその家族は、こんどのことを知らされていないかった。というのは、この人たちは、メング通りの人びとに

日ごろからいくぶん批判的であった。(上161頁)]

メング通りの人びとというのは、トーニもそこに含まれるブッデンブローク家主流の人たちのことである。三姉妹は敵役を担わされているのである。

(7) Da war Gotthold Buddenbrook und seine Frau, die geborene Stüwing, mit Friederike, Henriette und Pfiffi, die sich leider alle drei wohl nicht mehr verheiraten würden... (S.166)

[ゴットホルト・ブッデンブロークと、シュトゥューウィング家の娘である妻は、フリーデリケ、ヘンリエテ、ピフィーを連れてきていた。ざんねんながら、この三人の娘は、結婚できそうもなくなっていた。(上235頁)]

当時の娘たちにとって結婚できないというのは決定的に不幸な人生であったことを考えると、三姉妹がトーニに対して常に意地の悪い見方をするのも、嫉妬が根にあるであろうことが容易に想像される。

(8) Donnerstags, an den überlieferungsgemäßen ›Kindertagen‹, um vier Uhr, fand man sich in dem großen Hause in der Mengstraße zusammen, um dort zu Mittag zu speisen und den Abend zuzubringen – manchmal erschienen auch Konsul Krögers oder Sesemi Weichbrodt mit ihrer ungelehrten Schwester –, und hier war es, wo die Damen Buddenbrook aus der Breiten Straße mit ungezwungener Vorliebe die Rede auf Tony's verflossene Ehe brachten, um Madame Grünlich zu einigen großen Worten zu veranlassen und sich dabei kurze, spitziige Blicke zuzusenden... oder wo sie allgemeine Betrachtungen darüber anstellten, welche unwürdige Eitelkeit es doch sei, sich das Haar zu färben, und allzu anteilnehmende Erkundigungen über Jakob Kröger, den Neffen der Konsulin, einzogen. Sie gaben der armen, unschuldigen und geduldigen Klothilde, der einzigen, die sich in der Tat auch ihnen noch unterlegen fühlen mußte, einen Spott zu kosten, der durchaus nicht so harmlos war wie der, den das mittellose und hungrige Mädchen alltäglich von Tom oder Tony mit gedehnter und erstaunter Freundlichkeit entgegennahm. Sie mokierten sich über Clara's Strenge und Bigotterie, sie fanden schnell heraus, daß Christian mit Thomas sich nicht zum besten stand und daß sie ihn überhaupt, Gott sei Dank, nicht zu achten brauchten, denn er war ein Hans Quast, ein lächerlicher Mensch. Was Thomas selbst betraf, an dem durchaus keine Schwäche erfindlich war und der ihnen seinerseits mit einem nachsichtigen Gleichmut entgegenkam, welcher andeutete: Ich verstehe euch, und ihr tut mir leid..., so behandelten sie ihn mit leicht vergifteter Hochachtung. Von der kleinen Erika aber, rosig und wohlgepflegt,

wie sie war, mußte denn doch gesagt werden, daß sie in beunruhigender Weise im Wachstum zurückgeblieben sei. Worauf Pffiffi, indem sie sich schüttelte und Feuchtigkeit in die Mundwinkel bekam, zum Überfluß auf die erschreckende Ähnlichkeit des Kindes mit dem Betrüger Grünlich aufmerksam machte... (S.279f.)

[木曜日には、定例になった「子供の日」が午後四時に開かれ、みんながメング通りの宏壮な家へ集まって、昼食を食べ、一晩を一緒に過ごしたが、——ときにはコンズル・クレーガー夫妻も出席したし、ゼゼミ・ワイヒプロートも、無学の姉と出席した——。その集まりで、ブライテ通りのブッデンブローク家の婦人たちは、トーニの過去の結婚に、虫も殺さないような顔つきをして、好んで話題を向け、トーニに二言三言物々しい感想を述べさせて、毒のある目をして顔を見合わせるのであった。……あるいは、髪の毛を染めるなんて、なんてあさましい未練がましいことだろうと、一般論をぶったり、コンズル夫人の甥のヤーコプ・クレーガーの消息を、根掘り葉掘りたずねたりするのだった。憐れな、罪のない、辛抱強いクロティルデ、婦人たちに一目おいていたほんとうにただ一人のクロティルデも、婦人たちから当てこすられたが、この無資産で、いつも腹を空かしている娘が、毎日のように、トムやトーニから言われる小言を、間のびした、きょとんとした、にこやかな顔で受け止めているのちがって、婦人たちの当てこすりは、棘のないものではなかった。クララのきびしさ、信心も皮肉の対象になり、クリスチアンとトーマスの仲がうまくいっていないこと、クリスチアンが道化者で滑稽な人間で、うれしいことに、だいたい無視していいことを、すぐに婦人たちは知ってしまった。トーマスについては、どこにも欠点が見出せなかったし、トーマスもブライテ通りの婦人たちを、「あなた方の気持は、わかりますよ。お気の毒ですな。……」と言いたそうな寛大な平静な態度で扱っていたので、……婦人たちもトーマスには、棘はあっても、尊敬を感じる態度で接していた。しかし、エーリカ少女は、バラ色の顔をしていて、大切に育てられていたが、ブライテ通りの婦人たちに言わせると、発育が心配なほど遅れているそうであった。ピフィーは、貧乏ゆすりをしながら、口の隅に唾液を溜めて、とどめを刺すように、みんなの注意を呼びさました、少女が詐欺師のグリュエンリッヒに驚くほど似ていることに。…… (中42-43頁)]

(8) はブライテ通りの三姉妹の面目躍如といった場面である。トーニのみならず、コンズル夫人が髪を染めていることや、エーリカの発育具合にまで憎まれ口をたたいている。三姉妹の言動は物語の味わいを引き立てる少量の塩のような役割といったらよいだろうか。

### 2.1.5. 高尚と卑俗の同列

5番目の手段として、高尚なものと卑俗なものを同列に並べることによって、高尚なものを卑近化するという手法を挙げる。<sup>4)</sup>

- (9) Sicherlich hatte Thomas mit reizbarer Schmerzfähigkeit den Tod seines Vaters erlebt, als etwa sein Großvater den Verlust des seinen. Dennoch pflegte er nicht am Grabe in die Knie zu sinken, hatte er sich niemals, wie seine Schwester Tony, über den Tisch geworfen, um zu schluchzen wie ein Kind, empfand er als im höchsten Grade peinlich die großen, mit Tränen gemischten Worte, mit denen Madame Grünlich zwischen Braten und Nachtsich die Charaktereigenschaften und die Person des toten Vaters zu feiern liebte. (S.264)

[トーマスは、父親をなくしたとき、祖父が祖父の父親を失ったときよりも敏感に嘆き悲しんだ。しかし、そのトーマスも、墓前に跪くことは、一度もしなかったし、妹のトーニのように、テーブルへ身を投げかけて、子供のように泣きじゃくったこともなく、焼肉がすんで、デザートに移るまえに、トーニのように亡父の性格と人物を賛めちぎり、涙に暮れながら大げさな言葉を口にすると、トーマスは耳を蔽いたくなるほどたまらなく感じた。(中21頁)]

(9)は二代目(コンズル)が亡くなったときのトーマスやトーニの様子を描いたくだりである。死、葬儀、墓前といった厳粛な話題の中に、焼肉とかデザートといった事柄がはさまれるとその唐突感に驚かされる。しかし、悲しみの中でも人は食事をするものだという現実を思い出させもし、そんな人間が愛おしくもなる。

- (10) Dies war der Pastor Tiburtius, welcher aus Riga stammte, einige Jahre in Mitteldeutschland amtiert hatte und nun, auf der Reise nach seiner Heimat, wo eine Predigerstelle ihm zugefallen war, die Stadt berührte. Versehen mit der Empfehlung eines Amtsbruders, der ebenfalls einest in der Mengstraße Mockturtlesuppe und Schinken mit Schalottensauce gegessen hatte, machte er der Konsulin seine Aufwartung, ward für die Dauer seines Aufenthaltes, der einige wenige Tage in Anspruch nehmen sollte, zu Gaste geladen und bewohnte das geräumige Fremdenzimmer im

---

4) 梅原猛は『笑いの構造』の中で、「価値の高いものが、低いものと間近にコントラストされるとき、価値の同化現象というべきものが起こるのであろう。(中略) 価値にはいつも一種の引力が働き、同化現象は多く、価値の高い方の価値の低い方への価値低下という形で行われる。」と述べている。(梅原(1972): 97頁)

ersten Stockwerk am Korridor. (S.288f.)

[これがリーガ生まれで、数年間、中部ドイツで職についていた牧師ティーブルティウスであったが、こんど故郷に牧師のポストができたので、帰国する途中でこの町へ立ち寄ったのであった。やはり以前メング通りで子牛のスープと葱ソースをかけたハムを御馳走になった同僚から紹介状をもらって、コンズル夫人の御機嫌伺いをし、この町に二、三日滞在しなくてはならなかったが、その数日をこの家に逗留するようにすすめられ、二階の廊下沿いのひろい客室に寝起きするようになった。(中54-55頁)]

二代目が亡くなったあと、その夫人が大変信心深くなり、トーニに言わせると、そこにつけこんで食客になる宗教関係者がしばしばブッデンブローク家を訪れるようになる。(10)は後にトーニの妹クララと結婚する牧師ティーブルティウスの描写であるが、このように牧師を描写する途中で突然食べ物話が持ち出されると、皮肉を感じずにおれない。しかし同時に、地位職業に関わらずどんな人間でも美味しいものが好きという、大げさにいえばこの世の法則のようなものも感じさせる。

## 2.2. 『楡家の人びと』の場合

『楡家』については、ユーモアを醸し出す元になっている表現として以下の5点を挙げたい。

1. 辛辣で容赦ない人物描写
2. 滑稽な人物たち
3. オノマトペの多用
4. わざとくだけた(口語的な)言葉遣いの混入
5. 大げさな表現

### 2.2.1. 辛辣で容赦ない人物描写

『楡家』の場合の、ユーモアを醸し出す表現方法の1つ目は、辛辣で容赦のない人物描写である。ドイツ語訳のあとがきでエドゥアルト・クロープフェンシュタインは、『楡家』では語り手が作中人物と距離をとって、人物をよそよそしく扱っている点が目を引く、あまりに容赦がないので、読者はたとえば桃子のことなど庇ってやりたくなるほどである、と述べている。<sup>5)</sup>

(11) 乃木将軍が院長となって以来、平民の子女もは入れるようになった学習院の女学部  
に、さっそく龍子を入学させ、ついで聖子をもそこへ送りこんだのは基一郎の意図で

---

5) Klopfenstein (2010): S.980f.

ある。龍子は楡家にさまざまな学習院言葉を輸入し、基一郎はもちろんこれを嘉納した。はばかりのことを御不浄、お床をお床、蚊帳を蚊帳と呼ぶようなたぐいである。これはいかにもそぐわない、とってつけた、田舎者が東京の文明にあこがれるようなものであったが、基一郎の感覚では楡家にはこれが必要なのであった。なぜなら楡家は基一郎が一代で新しく創りあげ、なお創りあげつつあるもので、なんでもいいからほかと変った伝統みたいなものをかき集めたかったからである。学習院でも普通友達同士は「さん」づけで呼び、ときに「様」と呼ぶ。大名華族の子女は様づけで呼ばれるが、そうとわかれば基一郎が自分の家族に「龍さま」「聖さま」を持ちこませたのは当然のことともいえた。( I /24-25頁)

- (12) すると、「行列」が彼方からやってきたのである。あれは一体なんなのだろう、とはじめ黒田はいぶかった。しかし間もなく、先頭をきる紺の法被姿の男がおしたてている大幟の文字が目にはいった。そこには墨くろぐろと大書してあったのだ。「祝 楡基一郎先生御渡米」それは決して茶番とは映らなかった。あまりにも徹底した愚行はむしろ厳粛でもある。そのとおりの行列は肅々と進んできた。大幟のあとにはやはり法被姿の男が数名、それから相撲とりが何名かいた。もちろんべいべいの下っ端なのだろうが、そのひとときわとびだしたざんぎり頭はたしかに行列に異彩を加えていた。次に数台の人力車がつづいた。先頭の人力には、この日の立役者楡基一郎がフロックコート姿でおさまっていた。彼は貴族のように悠然と、こんなことは日常茶飯事だといわんばかりに軽くなげなく背をもたせていた。そして思いだしたように片手をそっと優雅にあげ、髭の先をひねりあげているようだった。( I /110頁)

(11) と (12) は、楡家の創設者楡基一郎の描写である。語り手は主要な作中人物に対しても距離を置き、徹底的に辛辣な調子で描写する。(11) では基一郎の成り上がり者的性格が、(12) では自らの大人物振りを自己演出するイカサマ師的性格が容赦ない筆致で示されている。

- (13) 龍子は、上甲板の椅子に憩っているアメリカ人船客と一緒に、椅子に背をもたせている。徹吉から見ると少しも似あわない、藤色の、裾に襷のたいそう多いジョーゼットのワンピースを着、緋子のリボンのついたつば広のホース・ヘアの帽子を目ぶかにたらしめて眠る真似をしているらしい。徹吉は英語を話すのが得意ではないし、短からぬ期間異国に暮したあとにもかかわらずやはり外国人と接するのは気が重く、彼らとは挨拶くらいしか交わさない。それなのに龍子は同船の日本人と交際するよりも、どうもすすんで米人たちの話に割りこんでゆく。聞いているとほんのわずか片言の英語をしゃべり、あとは

相手に頓着なく平然と日本語でおし通す。船の士官<sup>オフィサー</sup>がくると通訳をさせる。白人の子供の手を掴まえ、あちこちいじくり、「本当に可愛いわねえ。お猿さんみたいな顔をして」と、しゃあしゃあとした顔で愛想が悪口かわからぬことを言ったりする。(Ⅰ/295-296頁)

(13) はドイツでの勉学を終えた夫徹吉とパリで落ち合ってしばらく旅行をした後、日本へ向かう船上での龍子の様子である。龍子の物おじしない、悪くいえば図々しい性格が具体的に描写されて、よく伝わってくる。

(14) 龍子にとって、夫の行状、なかんづく次代院長として父基一郎の手腕を遥かに下まわるというその評判は、たとえがたく腹立たしいものであった。もとより尊敬する亡父が十八番だった「日本一頭のいい養子」という台詞をそのまま信じはしなかったが、いつぞや聖子にも述べたことがあるように、日本で千番目か一万番目くらいの能力は持っていることと信じていた。ところがどう思案してみても、最近の龍子の評価によると、その夫は日本で百万番目、いやいや一千万番目くらいの男に下落していた。(Ⅱ/77頁)

(14) は龍子の目に映る夫徹吉の姿であるが、「日本一」という決まり文句を元に、夫に対する評価の下落が具体的に数字を用いて辛辣にユーモラスに描写されている。

(15) なによりも榆病院の二代目院長である徹吉は、こうした院長業務に不適というか、病人を診察することよりも更に多くの時間を割かねばならぬさまざまな経営者としての実務、煩雑な末梢事に向いておらず、不器用で、頭がきれず、傍で見ても歯がゆいほどもたつくのであった。にもかかわらず、否応なく彼の背におわされた数限りのない義務は、徹吉をへとへとにし、すりへらし、めっきり白髪を殖やさせ、その二、三年の間に十年も歳をとらせ、むっつりと不機嫌にした。(Ⅱ/46頁)

(15) は病院経営に苦悩する徹吉の描写である。徹吉のこの方面での無能ぶりが、容赦のない簡潔さで述べられている。『ブッデンブローク家』も、三代目トーマスが商会の運営に悩む姿を描いているが、トーマスは無能だという断言がされることはない。しかしながら、一族の崩壊については、『ブッデンブローク家』では個人の資質にその原因が帰される。それに対し榆家の没落は、病院の火災や戦争による被害といった外的要因のせいとされる。

(16) そこで婆やは自分も寝巻に着かえ、電燈を暗くし、溶けそうにだぶついた頬を崩して周二の寝床にもぐりこんだ。龍子の子供たちの中で一番下っ端で人気もなくみんなからか

まわれぬ周二ではあったが、それを満たしてなおお釣がくるまで、下田の婆やの常軌を逸した愛情は、現在この子に注がれているのだった。楡家の子女を幾人となく次々と手塩にかけてきた下田ナオにとっても、おそらくこれが天から与えられた最後の務めと思われた。あまつさえ当年六十四となったナオの年齢が、彼女の柔らかな脳髓に硬化をひき起し、この六歳の男の子を構造からして違ったかけがえのない子供、世間に無数にいる他の子供たちからとび離れて可愛い特別あつらえの坊ちゃまと思いこませたのだ。周二のあまり利口そうでない行動に対しても、彼女は一種厚かましい解釈を下した。周二が障子を破ればそれは類い稀な資質による元気さのせいで、彼がめめすすればそれは言いたい品性の争えぬ現われで、彼がクレヨンで滅茶々々な図案を描けば、「このお歳でもう字を書きなさる」ということになった。もし万が一、周二がその兄や姉から泣かされようものなら、下田ナオは自分も胸が一杯になって、その肥満した体軀で周二の小さな身体をおおいつくし、「泣くんじゃありません、周ちゃま。ほらほら、婆やがついているのですからね」と、だらしなく甘く優しくなくさめる始末であった。(Ⅱ /35 頁)

(16) は楡家三代目世代の一人である周二と、楡家の子供たちを代々育ててきた下田の婆やの描写である。周二は作者自身がモデルであるためか、ことさら情けない少年として手厳しい書かれようをしている。

(17) 院代は、基一郎の乙にすましかえったおもかげ、その奔放なやり方を追想し、そうすることによって亡き院長の余人に真似のできぬ直感力が自分にも附与されてゆくような気がした。その神秘的な直感力に従い、彼は麦畠の中に途方もなく巨大な広告板を打ち立てた。それは前を過ぎる小田急電車の窓からもずいぶんと威圧的に大きく見え、院代勝侯秀吉は、それを眺める電車の乗客がみんな頭が変になり、立派な精神病患者となって、押すな押すなと病院におしかけ、たしかに生きてにこやかに微笑している基一郎院長が、院代よくやると讃めてくれる夢を、ある夜実際にまざまざと見た。(Ⅱ /51 頁)

院代とは院長代理の略である。病院を創設した基一郎が、ついに医師になれなかった書生の勝侯をその事務能力を買って事務長にし、それにつけた役職名である。勝侯は基一郎に恩義を感じ続け、基一郎の死後も病院に忠誠を尽くす。(17)はそのありさまが語られているくんだりだが、このおかしみはグロテスクすれすれな感じがする。

以上、基一郎、その長女龍子、龍子の夫徹吉、徹吉の次男周二と下田の婆や、院代勝侯秀吉についての描写を例に、辛辣で容赦のない人物描写について見てきた。これらは語り手が作中

人物に感情移入などせず、距離をもって眺めなければできない描写である。『ブッデンブローク家』では、クリスチアンを除いて、主要な人物にはそもそもおかしいところはないし滑稽な描き方もされない。それに対し『楡家』では、この項で見てきたように主要な人物たちにも常軌を逸した面があるとされ、しばしば滑稽に描かれる。

### 2.2.2. 滑稽な人物たち

上で見たように、『楡家』では主要人物にも尋常でないところがあり、そこを容赦なく滑稽に描いているが、脇役クラスになるとさらにおかしな人物がぞろぞろ登場する。舞台が精神病院ということも関係があるだろうが、物語の中で重要な位置を占めるおかしな人物の多くは脳病院の患者ではない。

- (18) ビリケンさんは新聞を声をだして読むのである。朗読するのである。しかも突拍子もなく面白い抑揚をつけて。たとえ内容はよく理解できなくとも、桃子にとってそれは楡病院という雑多で広範囲な機構から生ずるさまざまな愉しみの一つとってよかった。/ ビリケンというのは一時流行した西洋人形の名称であったが、それに加えてついこの間まで政権を握っていた寺内前首相の渾名でもあり、ちょっと頭のとっぺんが突出している人間は当時よくこの渾名を冠せられたものである。楡病院のビリケンさんもまた、イガグリ坊主の顛頂がおあつらえむきにとがっていた。彼はもう何年も病院にいる施療患者の一人で、どこかわからないが確かに脳がわるいということだった。楡基一郎は昔は内科百般の医者であったが、独逸では主に精神病学を修め、帰朝してからは脳を病む患者をあつかいだした。青山に新病院を建設してからは、門には二つの看板がかけられた。一つは以前からの『楡病院』であり、もう一つは『帝国脳病院』という名称である。現在では実際のところ、結核をはじめとする各種の病人もいることはいたが、入院患者の主流は精神病の人たちが占めていたのである。/ もっともビリケンさんがどんなふうにも脳がわるいのかは、桃子はもとより下田の婆やにもわからなかった。もうずっと以前から彼は病院内を普通に歩きまわり、配膳の手伝いをしたり植木を移すのを手伝ったりしていて、言動にしてもそれほど変っているとは思われない。もしかしたら新聞を節をつけて読むのが病気なのかも知れない、と桃子は思ったりした。( I / 19-20 頁)

ビリケンさんは (18) に書かれているとおりのおかしな人物ではあるが、彼の読みあげる新聞

記事が物語の時の流れを示すうえで重要な働きをしている。<sup>6)</sup>

- (19) それは大きすぎて大飯食らいで、とうとう東京の楡家の養子となったあの山形の怪童であった。その並外れた図体は決して恵まれた良質の発育の結果とは見えなかった。むしろ一種の畸形、自然に反した異常発達、脳下垂体ホルモンの分泌不均衡による肉体の滑稽な膨張と思われた。しかも彼はまだ小学六年生なのである。これからの身長の雪だるまの増加は保証されているとあってよかった。/(中略)/が、それでも怪童はべたりと坐ったままであった。彼の身体に逆比例した小心と内気、これまで過してきた人生が彼に**あ**びせてきた好奇と嘲笑が、この少年に自分の身長を能うかぎり人に示すまいとする習性をさずけてしまったのだ。(I /112-113頁)

蔵王山の巨大な図体と小心さのコントラストが滑稽である。(19) はまだ子供時代の姿の描写であるが、彼はこの後、相撲取りになってからも物語にしばしば顔を出す。

- (20) 楡病院の賄い界限には、更に多様な人間がたむろしていた。その一人々々が、脳細胞のあまり豊かといえぬ桃子に大なり小なりの影響を与えるのである。/ぐうたら者で有名で、いつぞやただなんとなく病院の玄関に立っただけで基一郎からねぎらわれた書生は、佐久間熊五郎といういかにも働きのありそうな名であった。そのくせなにひとつ仕事をしようとせず、勉強とてせず、賄いで食事をしたあともっとも愚図々々と油を売っている常連の一人であった。/彼は歳こそ若かったが賄いでは顔役といえた。無駄話をするとき、その並外れた胸間声はたしかに他の声を制圧した。まして彼は戦争の話が大好きであったから、その甚だしく唾をとばす話しぶりが勇ましいのもやむを得ないといわねばならなかった。/(中略)/ところがこの熊五郎は、戦後の不況が訪れだしたころ、急転直下、社会主義者をもって任じだした。(I /195-197頁)

楡家は大勢の書生を常に抱えているので、外見も性格もさまざまな若者が多数登場する。熊五郎はぐうたらで出来の悪い書生の代表格である。

- (21) そのように母親の前ではかしこまっているくせに、その母がいなくなると、米国の言動にはかなりの変化が見られた。だしぬけに千代子にむかって、「ぼくは考えるところ

---

6) ドイツ語訳のあとがきで、新聞記事を朗読する人物を設定することによって時代や世相の変化を伝えるという手法は卓越していると評価されている。(Klopfenstein (2010): S.978f.)

があって、しばらく肉食をやめます」と言ったことがあった。その「考えるところがあって」という言い方には、ずいぶんと深刻げで不可知な悩みのごときものが感じられ、彼女はなんとなく気味がわるかった。そうかと思うと、いきなり「ぼくは肺病ですから、バタを食べねばならない」と独りごとのように呟いて、半ポンドのバタを豆腐でも食べるように一度に半分ほど平らげてしまったこともあった。この「肺病ですから」には、千代子はもっと心配になり、歐洲に訊いてみると、「なに、あいつの口癖さ」ということであった。(Ⅱ /161-162頁)

徹吉の次男米国<sup>よねくに</sup>の人物像はまさに『ブッデンブローク家』のクリスチアンを彷彿とさせる。クリスチアンは『ブッデンブローク家』の主要人物では唯一、滑稽な道化者という描かれ方をされている。『楡家』では、先にも述べたが、多くの主要人物もどこかしら常軌を逸しているというふうには滑稽に描かれるので、その点では米国の変人ぶりはあまり目立たない。それでもやはり米国は、『楡家』において『ブッデンブローク家』のクリスチアンに匹敵する滑稽な道化者として存在感を示している。

### 2.2.3. オノマトペの多用

『楡家』においてユーモアを醸し出す表現方法の3つ目として、オノマトペの多用を挙げておこう。本稿に先立って、日独語における諧謔表現の相違を探る端緒として『楡家の人びと』をそのドイツ語訳と対照させて検討したときに、実況中継を思わせる臨場感のある語りについても触れた。<sup>7)</sup> オノマトペは臨場感ある語りにとって大変効果的なものであるが、多用すると文章から高尚な感じは奪われ、卑近な雰囲気をもたらす。

(22) いつも彼は必要以上にせわしく算盤をはじいている。首をのばして帳簿をのぞきこむ。それから不安に堪えかねたように天井を見あげる。また算盤をばちばちやる。ついでよろよろと立上り、事務室の隅にある金庫の前にかがみこむのだ。神経質にぎざぎざのある重い文字板を合わせ、どっしりとした扉をひきあげ、内部を覗きこんでなにやらぶつぶつ呟いている。それからのろのろと扉をしめ、机に戻り、ふたたび帳簿を見やって吐息をつく。(Ⅰ /42頁)

(23) 彼女はすいと立上った。ちょっと隣室へ行きかけたが、くると向きを変え、障子をあけて廊下へ出ると階段をぎしぎしいわせながら降りていってしまった。/ 姉の足音が聞

---

7) 宮内 (2015) : 287-291 頁。

えなくなり、なんの気配もしなくなってから、かなりしばらくの間聖子は身じろぎもしなかった。( I /156頁)

(22) と (23) の文例では、オノマトペがいわば過剰に使われている。両方とも特におかしな場面ではないし、(23) はそれどころか重苦しい状況の描写であるが、オノマトペのせいで深刻さは薄れてしまっている。

(24) 年に何回かここでは患者慰安のための演芸会が催される。日比野雷風が居合抜きを見せたり、男女の漫才がやたらとばちばち扇子を鳴らしたり、職員と患者有志によるちょっとした芝居が演じられたりする。もちろん賞与式のあとの従業員の宴会もここでやるのだし、基一郎の衆議院出馬のときには無数の手紙の発送はここでなされた。職員から書生から動員されてせっせと宛名を書いたり印刷物を入れたりさせられたが、そのうしろを末っ子の米国がちょこちょここと走り、桃子はすっかり面白くなって自分も一生懸命切手の糊を嘗めた。( I /55-56頁)

先に、『ブッデンブローク家』の邦訳の際にオノマトペが活用されていることに触れた(本稿 2.1.2. の項)。逆に日本語原文にオノマトペが使用されている場合、ドイツ語訳はどうなっているのだろうか。例えば (24) 中の「米国がちょこちょこ走る」というくだりの訳を確認してみると、*Hinter ihnen trippelte Yonekuni, der jüngste Sprosse der Familie, auf seinen kurzen Beinen umher, (…)* (S.54) となっている。*auf seinen kurzen Beinen umhertrippeln* [彼の短い脚であちこち小走りに歩く] というように、説明的で長い表現が使われており、日本語表現におけるオノマトペの威力が再確認される。

#### 2.2.4. くだけた (口語的な) 言葉遣いの混入

(25) ついにこれは楡脳病科病院ではどうにもならんということになり、さいづち頭の看護人は眼に涙をためてよその専門の病院へ行かねばならなかった。( I /123頁)

(26) 下田の婆やは、若い看護婦や、ましてや痘痕の熊五郎の無骨な腕には、この大切な宝物を渡したがらなかった。もし万一、落っことしでもしたら。そうでなくても、このお姫さまは特別に脆く華奢にできているのだから、そう、婆やは——それが龍子の意図であるかどうかはわからなかったが、——この特別製の赤子のことを、口をすぼめるようにして「お姫さま」と呼んでいた。( I /344-345頁)

オノマトペも口語的なある意味くだけた言葉遣いともいえるが、(25) や (26) に見られるようなくだけた口語表現が『楡家』の地の文には時おり混じりこむ。これもまた物語の調子を卑近な方向へ引っ張る働きをする。

### 2.2.5. 大げさな表現

ユーモアを醸し出す表現方法の5つ目は、誇張法である。針小棒大ともいえる大げさな表現が目につく。

(27) もう桃子はこらえきれなかった。彼女は泣き上戸であると共に笑い上戸でもあったのだ。泣くほうは造り物のような大粒の涙を奇術のように分泌するだけで声は立てないが、笑うほうはまったく節度のないげらげら笑い、ころがって苦しむほどの莫迦笑いになりがちである。彼女は懸命にこらえた。そのため無理に体内に押しこめられた衝動は、彼女のただでさえ愛嬌のありすぎる顔をむざんに歪めた。喉元は痙攣し、その辺りから、なんだか拷問にでもかけられたような、まさに断末魔ともいえるばかりの不気味な音声が洩れた。(I/81 頁)

(27) はまだ幼い桃子が、父親の病院の賞与式という行事に出席し、そこでおかしな身振りをする人物を目撃して笑いをこらえきれなくなった場面である。幼女の笑いは普通かわいいものであるが、かわいいですまない大変な状況が目につく。

(28) なにしろ彼は減多にないことに、自ら信ずるところによれば全身の血液の三分の一を失い、まさに死の一步前まで両足を踏みこんだ得難い人間で、一人きりで思うさまジェリーを食べる資格充分な持主なのだ。(II/32 頁)

(28) は、欲しそうな顔をしている弟周二の前で、鉢一杯の苺入りのジェリーを一人食べ続ける峻一の様子である。峻一はかなりの量の出血があったとはいえ鼻血を出しただけなのである。

(29) この夜も、下田の婆やはたわいもなく眠ってしまった。すでにその寝息は次第々々に高まってゆき、喉にからみ、鼻孔にからみ、どうしてかような音響が生れてくるのか信じられぬほどの鼾となって、ついにはでっぷりと肥満した身体全体がただならず震動する小山となった。/(中略)かたわらで、大好きな下田の婆やが、今はまったく別種の、突けども押せども反応のない取りつく島もない物体と変じて、たとえようもなく怖ろし

い躰を立てていた。吸入された空気が彼女の鼻の奥でぶつかりあい反響しあい、わずかの間隔をおいて、今度は吐きだされた息が彼女の喉でごろごろと鳴動し、ときにはははとなって寝床から逃げだしたくなるほどの、圧倒的な、おしつけがましい、にぶくしんだ咆哮となった。(中略) 今や縁もゆかりもない不気味な怪獣のようにすら思われた。(Ⅱ/37-38頁)

(29) は下田の婆やがたてる怖ろしい躰の描写である。やさしい婆やが怪獣にまで化している。

(30) 彼らの幼いとき、まだ箱根登山鉄道は小田原まで連絡していなかった。たいてい藍子たちは、下田の婆やと一人の書生、或いは一人の女中と共に新橋から汽車に乗る。汽車に酔う下田の婆やは早くも気分悪げにぐったりとして、万一のときの用意に小さなバケツを手元に引寄せたが、しかし要所々々の駅で子供らにアイスクリームを買ってやることは忘れないでいてくれた。婆やの気の毒な酔いぶりは——藍子はときどき気まぐれの優しさを見せてその老いて丸まった背中をさすってやったものの——子供たちとは結局は無縁なもので、二人とも箱根がもっとも遠方に、地球の涯にでもあればよいと考えていた。その間には数百、数千の駅があることだろう。そして自分たちは終点に着くまでに一体どのくらいのアイスクリームを、きっと世界のアイスクリームが品切れになるくらいの量を食べることであろう。(Ⅱ/225-226頁)

(30) はいかに子供たちがアイスクリームを好きか、食べたがっているかが実によく伝わってくる大げさな表現である。

### 3. まとめと考察

以上、『ブッデンブローク家の人びと』と『楡家の人びと』のユーモアを醸し出す表現について、文例を挙げつつ見てきた。その表現手段を『ブッデンブローク家』では、ライトモチーフ、詳細な人物外見描写、体験話法、敵役の見解の紹介、高尚と卑俗の同列の5種類に、『楡家』では、辛辣で容赦ない人物描写、滑稽な人物たち、オノマトペの多用、わざとくだけた(口語的な)言葉遣いの混入、大げさな表現の5種類に分類してみた。両作品ともユーモアを感じさせるが、その表現方法には共通するものもあるが、相違もある。その相違の根本的原因の一つとして、日本語とドイツ語、それぞれの言語によって制約を受ける語り手の在り方を挙げられると筆者は考えている。

日本語と英語の語りの相違について、山岡實は以下のように述べている。ドイツ語も英語とほぼ同様に考えてよいのではないかと思う。

英語の物語の場合は、語り手は「不動の自己」を有する絶対的存在として、物語世界外の発話時点（Now1）に存在し、その時点から出来事・状況を過去のものとして語る。それに対して、日本語の物語では、語り手は「動く自己」を有する相対的存在として、物語世界内の発話時点（Now2）に移行したり、登場人物の発話時点（Now2）に移動することができる。そのため、語り手は、登場人物と一体化しやすく、登場人物が物語世界の現場（Now2）で知覚・体験すると同時に語るという、いわゆる内的独白（自由直接話法）が頻繁に用いられる傾向がある。<sup>8)</sup>

『楡家』とそのドイツ語訳を対照させた時も、語りの視点が西洋の小説とはだいぶ異なることに、あらためて気づかされ、日本語小説では語り手の立場が融通無碍・自由自在で、一定していないことに注目せざるを得なかった。地の文なのに誰の推量なのか、誰が受けた印象なのか、誰がもった感慨なのか、明確に書かれていないケースが多数見受けられた。山岡が主張するように、日本語による小説の語り手は「動く相対的自己」であると考えれば、それもすんなり納得がいく。そして、そんなふうに語り手が動けるのは、日本語は発話原点が固定ないし安定しているという日本語の特性からきている。これは、日本語母語話者には主観的把握の傾向があり、事態を描写する際、自らを事態の中に置き、発話の現場に密着した視点をとりやすい、ということと関係している。

一方、語り手が「動く相対的自己」だとすると、全知視点、神の視点での語りやりにくいということにつながる。高みから見ようとしても、つい地上に降り立ち、現場に入ってしまうということになるからである。また、語り手の視点と作中人物の視点という2つの視点を必要とする、体験話法が成立しにくいということにもなる。

『楡家』の作者である北杜夫は、辻邦生との対談の中で、喜劇を書くには、高いところから見るか、距離をとって見るかだと語っている。<sup>9)</sup>『楡家』では作中人物に対して語り手が距離をとっている、とドイツ語訳のあとがきで指摘されていたことが思い出される。『楡家』の作者は、日本語では、ドイツ語小説『ブッテンブロック家』のように俯瞰ができないことを認識して、上からではなく水平方向に距離をとることで、人間喜劇の執筆を試みたのではないだ

8) 山岡（2000）：134-141頁を宮内がまとめたもの。下線も宮内による。

9) 「望月市恵さんが『ブッテンブロック家……』の新訳のあとで、マンのことを書いていて、マンの作品は、世界を上から俯瞰しているような視点で書いている、と言っておられる。（…）すべてのものを、いま言ったような〈高み〉から見られるようになる、同じそういう事件ですら、〈喜劇〉と見られるようになる……。」という辻の発言に対し、北は「〈高い〉、あるいは〈距離〉だね。」と答えている。（北/辻（1974）：106-108頁）

ろうか。辛辣で容赦のない人物描写は、水平方向に距離をとった結果である。

ジャン・パウルの見解によれば、ユーモアとは総体的なものであって、個々の対象を攻撃するのではなく、有限なものすべてを減ぼす。というのも無限性の前ではすべてが平等で無だからである。だから、ユーモアには倒錯した崇高さがある、ともいう。<sup>10)</sup> トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』と北杜夫の『楡家の人びと』、この両作品は表現方法は異なるにせよこのようなユーモアを作品の中に醸成することに成功している。

## 使用テキスト

Thomas Mann: *Buddenbrooks: Verfall einer Familie*. Gesammelte Werke in Einzelbänden. Frankfurt am Main (S. Fischer), 1981. [邦訳：望月市恵訳『ブッデンブローク家の人びと』(上・中・下) 岩波文庫, 1969年]

北杜夫『楡家の人びと』(第I部・第II部・第III部) 新潮文庫, 2011年. [ドイツ語訳：Kita Morio: *Das Haus Nire: Verfall einer Familie*. Aus dem Japanischen übersetzt von Otto Putz, Berlin (be. bra), 2010.]

## 参考文献

梅原猛 (1972)：『笑いの構造：感情分析の試み』角川書店。

北杜夫 / 辻邦生 (1974)：『若き日と文学と〈対談〉』中公文庫。

熊倉千之 (2006)：「〈主観〉を本質とする日本文学：語り手の声が出する世界」、『言語』2006年5月号、28-34頁。

小林英信 (1978)：「トーマス・マンにおけるイロニーについてのノート」、岩手大学人文社会科学部『Artes liberales』第22号、29 - 45頁。

小森陽一 (1988)：『構造としての語り』新曜社。

近藤安月子 / 姫野伴子 (2012)：『日本語文法の論点43：「日本語らしさ」のナゾが氷解する』研究社。

鈴木康志 (2005)：『体験話法：ドイツ文解釈のために』大学書林。

田中暁 (2007)：「イロニー考：トーマス・マンを中心として」、広島大学大学院総合科学研究科『文明科学研究』第2号、29 - 428頁。

中山真彦 (1995)：『物語構造論：『源氏物語』そのフランス語訳について』岩波書店。

深沢恒男 (1971)：「トーマス・マンの「ブッデンブローク家」にみられる客観化の手法としての体験話法」、『信州大学教養部紀要、第一部、人文科学』第5号、71 - 81頁。

深沢恒男 (2003)：「トーマス・マンの物語にみる語りの機能について」、慶應義塾大学『研究年報』第20号、160 - 177頁。

保坂宗重 (1963)：「Buddenbrooksのライトモチーフ技法 -1-」、『茨城大学文理学部紀要、人文科学』第14号、113 - 127頁。

宮内伸子 (2015)：「北杜夫の『楡家の人びと』のドイツ語訳について：日独語における諧謔表現の相違を探る端緒として」、『富山大学人文学部紀要』第63号、281-297頁。

山岡實 (2000)：『「語り」の記号論：日英比較物語文分析』松柏社。

Jean-Paul (1980): *Vorschule der Ästhetik*. In: Jean Paul. Werke. Hrsg. von Norbert Müller, München

---

10) Jean-Paul (1980): S.125.

(Hanser), Bd.5.

Klopfenstein, Eduard (2010): Nachwort von *Das Haus Nire: Verfall einer Familie*. Berlin (be.bra), S.967-981.